poco a poco

パラグアイ便り　2024/09/01 Número19

2022年度　青年海外協力隊
氏名：吉田　花純
職種：小学校教育

【ラストスパートをかけています】

残りの任期も半年を切りました。大変有難いことに、次から次へと新たな活動のチャンスが舞い込んできたり、週末のイベントへのお誘いがあったりするなど、今にも帰国日を迎えてしまいそうなほど充実しています。

今月も自分の配属先に他校の先生方をお呼びして、算数に関する研修会を行いました。これまでにも何度も実施してきましたが、思いつく限りの準備をしたとしても“まずまずの出来だった”と思えたことは一度もありませんでした。改善点とひたすら向き合いながら活動を続けてきました。しかし、今回の研修会では初めて“そこそこ上手くいったのではないか”と、感じることができました。そう感じられたのは、私自身の準備が完璧であったという訳ではありません。これまで時間をかけて培ってきた先生方との信頼関係が良い結果に結びついたのだと、そう言い切ることができます。特に、ともに中心となって研修会を企画し進行した先生方とは“こんなことをしたい。あんなことをしたい。”と互いにアイディアを出し合うだけでなく、理由や意図を丁寧に伝え合うことを大切にしてきました。その甲斐あってか、私が伝えたがっていることについて補足説明をしてくれたり、私の意図を汲み取り臨機応変にサポートしてくれたりしました。

教員としての経験年数は、私よりも現地の先生方の方が圧倒的に長いです。それでも、意欲的に研修会に参加してくださったり、そこで私が提案したことを後日、各々の学校で実践し、その写真を送ってくださったりするなど、嬉しいことがたくさんありました。パラグアイに到着する前、到着後、そして現在と、自分の活動の目標は変化し続けていますが、今の目標の1つに『現地の先生方と一緒に“教員”としてのやりがいや面白さを一緒に感じたい。』というものがあります。この研修会では、子どもになりきって算数のミニゲームに熱中したり、オリジナリティを発揮しながら教材作りに取り組んだりするなど、先生方の意欲と笑顔が輝いていました。

【お祭り週間】

以前、通信第7号でご紹介した通り、パラグアイには“子どもの日”という大事な日があります。日本の“子どもの日”とは違い、戦争という悲しい歴史に由来しており、お祝い事がたくさんあるパラグアイですが、この日は特に大切にされています。同じ週に国旗の日や首都アスンシオンの創設記念日があり、その週は毎日学校で催し物が行われました。おかしな髪型や仮装をしたり、サッカーの大会やパーティーをしたりするなどです。それぞれが自分の好きなものを身にまとい、生き生きとした表情でステージを歩く姿はとても眩しかったです。先生達も負けず劣らず、思い思いの衣装を着て、歌って踊って大盛り上がりでした。パラグアイでも大人気の、日本の有名キャラクターに仮装する先生もいました。

【ひとこと】

現在パラグアイでは“インクルーシブ教育”の実現に向けての動きが強まっています。私の住んでいる地域では、障がいの有無に関係なく“すべて”の児童が同じ学校で学ぶ環境を整えようとしています。私の配属先にも、障がいがある児童は何人もいます。その中でも、ある児童はいつも車椅子を使っており、左腕と左足を頼りに生活をしています。賢く愛嬌のあるその児童はみんなから愛され、学校中の人気者です。今月行われたサッカー大会には、その児童も選手として出場しました。ボールに触れるチャンスはどうしても少なくはなってしまいますが、時々片足だけで立ちながらキラキラの笑顔で楽しそうに友達と一緒にボールを追いかける姿は印象的でした。そして、試合終了後に満足そうな表情を浮かべたその児童と、優しい笑顔で試合を見守っていた父親が元気よくハイタッチをする姿に心動かされ、思わず涙してしまいました。その試合を見ている間に様々な感情が込み上がり、いろいろと考えさせられました。

“インクルーシブ教育”の捉え方や実践には、まだまだ改善の余地がありそうだと感じることは多々ありますが、障がいの有無を全く気にせず友達と楽しく関わる子どもたちや、怪我の心配をする気持ちをぐっとこらえて本人の意思を尊重する愛情と優しさに溢れた児童の父親のことを、とても素敵だと感じました。今回のように他の友達とは少し違った方法であるとしても、どんな児童も自分の好きなことやりたいことを実現できる教育現場や社会の仕組が整っていくことを心の底から願います。